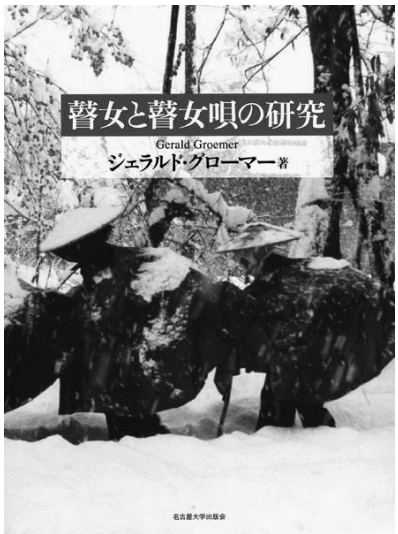
学生の多くは、親元に住み遠方から通い、大学周辺に下宿する学生でも米国の学生のような気軽さはなく、出かけるには数日あるいは数週間も前に約束しなければ実現しない。また、こちらが日本語で話しかけても英語で返事がくる。日本人学生は英語を練習したいようだった。結局、日本語を習ったのは、独学とテレビからだった。

当時はドル建てで奨学金を受けていたが、一九八五年九月のプラザ合意により、一ドルが一気に二四〇円から一四〇円に暴落し、奨学金が事実上突然四割削減されることとなり、生活は苦しかった。しかし、当時はまだ留学生は週二〇時間までアルバイトが許されていたため、英語やドイツ語を教えてなんとか生活費を稼いだ。

さらに不運は続き、ハワイ大学では助手のポストに就いていたが、来日中に後任が決まったため、帰国も不可能となった。しかし、これもまた不幸中の幸いで、一年の留学では研究どころかその準備が始まった段階であったため、修士課程・博士課程に進学し、あと数年日本に留まり勉強することにした。



著書『瞽女と瞽女唄の研究』
（名古屋大学出版会）
田辺尚雄賞、小泉文雄音楽賞受賞

瞽女（ごぜ）文化との出会い

来日当初は津軽三味線の研究をしていたが、方言が大きな壁となった。津軽弁から共通語への通訳を交えてのフィールドワークとなる。

その後藝大の図書館にあった瞽女のレコードに目を引かれ、関心を持つようになった。瞽女は戦後まで新潟県をはじめほぼ全国で活躍した視覚障害を持つ女性芸人である。最後の越後瞽女、小林ハルとの面会も果たし、研究を続けた。

瞽女たちは主に関東甲信越で相互扶助組織をつくり、津々浦々まで巡業を行い、地方の音楽文化に大きく貢献した。明治以降には静岡県や山梨県などで禁止され瞽女は姿を消したが、新潟県では弾圧は免れた。その結果、瞽女唄が録音され、記録映画が撮影され、研究が盛んに行われた。

しかし、それらの研究の大半が民俗学あるいは文学の分野が主で、歴史や音楽の視点からの取り組みは少なかったので、自分の研究の出発点をそこに置くことにした。はじめはいくつかの短い論文を執筆する計画であったが、探せば探すほど貴重な史料が出てくる。「瞽女文化」の広さと深さの実態が次第に明らかとなり、執筆した原稿の量が次第に増え、ついには上下に分かれた二〇〇〇頁近い大著にまで膨らんだ。それでも興味深い資料をたくさん割愛せざるをえず、それらは将来の発表の材料にしたいと考えている。

日本には一年の予定で来日した。それが、二年となり五年となり、途中、博士課程修了後三年半ほど米国で仕事をしたが、日本での生活ももう二十年以上になる。現在、山梨大学で民族音楽・西洋音楽を教えているが、学生たちよりも日本で生きている期間は長いことになる。最初の一、二年の苦労は、振り返ってみれば良い思い出となり、また面白い経験でもあった。多くの方々の叱咤激励があり今がある。お世話になった方々に、心よりお礼申しあげたい。

留学の思い出

山梨大学教育人間科学部教授
ジェラルド・グローマー
Gerald Groemer

皇太子奨学金学生（一九八五～八六年度）。米国出身。D.M.A.（Doctor of Musical Arts ジョンズ・ホプキンズ大学ピーボディ音楽院）、芸術博士（東京藝術大学）。ハワイ大学助手（民族音楽学）、アールハム大学助教授を経て、九八年より現職（音楽学）。

皇太子奨学金に応募したとき、私はハワイ大学で民族音楽学を学ぶ大学院生だった。東京藝術大学大学院の研究生として留学しようと決意したが、学生生活が軌道に乗るまでには幾重もの壁を乗り越えなければならなかった。

まず、大学に入学する際に求められた「保証人」には驚いた。足を踏み入れたこともない国で保証人を確保しなければならないのか、と途方に暮れた。幸い米国で親しくしていた日本人留学生の友人が快く引き受けてくれたが、最後まで申し訳ないと感じていた。また、留学するにあたり、書類には日本での住所、電話番号、銀行口座番号など、まだあるはずがない項目が多く含まれていた。留学制度は留学経験のない、また自国の学生事情しか念頭にない行政関係者が司っているのだとつくづく思った。

心弾ませ藝大に入学。しかし……

藝大には一九八五年十月に入学したが、時間割表やその他の情報は事前に送付されず、来日後大学で入手することとなった。つまり、来日したときは最初の授業日がいつなのかもわからない状態だった。当時は、大学側の留学生受け入れ体制も全くできていなかった。

入学する数週間前に来日を希望し、半年前にはビザを申請したが、下りたのはぎりぎりで、待っている間はやきもきした。そしてようやく奨学金とビザを手に入れ、心弾ませ日本に向かった。

日本では、外国人にとって住宅確保がなかなか難しい。外国人は入居を断られることもしばしばあると聞き心配したが、保証人を引き受けてくれた友人がすでに帰国しており、彼のつてで東京にアパートを借りることができた。外国人寮は当時なかったと記憶している。あったとしても、日本語も勉強しなければならない者にとり、外国人しかいない環境はよくない。

友人づくりにも苦労をした。米国では、大半の学生は大学近辺に住み、気の向くままに互いの部屋に立ち寄り、勉強、私事を問わず心中をさらけ出して遠慮なく語り合うのが当たり前だった。ところが、藝大の

●皇太子明仁親王奨学金（二〇〇八年二月に名称変更）は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。